

八代の工芸品

江戸時代のたくみのわざ

平成18年2月9日(木)～3月21日(火)

冬季特別展覧会

肥後国絵図(天保期)の八代部分



八代市立博物館未来の森ミュージアム
Yatsushiro Municipal Museum

〒866-0863 熊本県八代市西松江城町12-35

TEL: 0965-34-5555 FAX: 0965-33-9200

<http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp/museum/>

八代の工芸品

江戸時代のたくみのわざ

平成十七年八月の合併で、新「八代市」が誕生しました。新しい八代市域の江戸時代の姿をふりかえってみると、八代郡のほぼ全域と芦北郡の一部になります。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦後、肥後国のうち、天草郡と球磨郡を除いた十三郡は加藤清正の領するところとなります。当時の八代城は球磨川河口の麦島（あしま）にあり（麦島城・天正十六年一五八八年に小西行長が築く）、加藤氏の支配となつた後、慶長十七年（一六一二）、家老の加藤正方が城代に任命されます。

元和五年（一六一九）、麦島城が地震で崩れたため、正方は、球磨川北岸に新城を築きます。これが現在も八代市中心部に城跡を残す松江城（八代城）で、元和八年（一六二二）完成しました。

寛永九年（一六三二）、加藤氏が改易され、豊前国小倉城主の細川忠利が熊本城に入ると、八代城には忠利の父三斎（忠興）が入ります。正保二年（一六四五）三斎が没し、翌年、藩の筆頭家老長岡（松井）興長が八代城守衛に任命され、明治三年（一八七〇）まで松井氏が代々この城を守りました。八代城下町は、五ヶ町（熊本・八代・高瀬・川尻・高橋）の制のもと、諸種の特権が与えられ繁栄しました。

一方、八代郡は野津・種山・高田の三つの手永と、幕府直轄領の五箇庄からなり、現在の日奈久・二見・坂本は芦北郡田浦手永に属しました。手永とは、熊本藩独自の行政区分で、郡と村の中間に位置します。

江戸時代、八代海辺の新田開発が進み、生産力が増加。さまざまな産業が保護奨励されました。こうしたなか、八代ならではの工芸品が数多く作られました。

江戸時代後期に、熊本藩内各地の特産品を相撲番付風に紹介した「名物数望附」（※注）という書物によれば、八代地方の名物として、

八代焼（高田焼）

八代焼は、高田焼ともいい、八代郡・高田手永（当時）で焼かれていた焼き物です。その始まりは、加藤氏の時代にさかのぼりますが、くわしいことはわかっていません。

細川氏の肥後入国に伴い、三斎について豊前から八代へ移り住んだ喜蔵（豊前上野焼の陶工）は、加藤時代からの窯があつた高田・奈良木村の木下谷で作陶を始めたといわれています。

喜蔵死後の万治元年（一六五八）、喜蔵の長男忠兵衛と三男徳兵衛は、高田・豊原村の平山へ窯を移します。寛文九年（一六六九年）以降、藩から扶持を受け、御用焼物師をつとめました。その製作は、藩の御茶道方の指導をうけ、茶器を中心に、幕府への献上品や諸大名への贈答品なども生産しました。

上野家は、木戸上野・中上野・奥上野の三家に分かれて共同で生産にあたり、伝統の継承と発展につとめました。幕末の記録によれば、その原料は、大部分が地元高田の土で、松山（現宇土市松山町）の土、白土には白島坂（芦北郡）の石を砕いたもの、薪には球磨川筋や日奈久の松が用いられています。

平山窯は、明治二五年（一八九二）まで用いられ、現在は県指定史跡として保存されています。

（詳細↓展覧会図録「八代焼―伝統の技と美―」平成十二年・本館発行

（上）象嵌鞆文水注

底印「藤四郎（カ）」

（左）象嵌牡丹文水指

江戸時代中期（十八世紀）



五色水玉紙 江戸時代中期～大正時代



宮地紙

高田手永の宮地村一帯で生産されていた紙で、筑後国下妻郡溝口村の柳川藩御用紙漉き新左衛門によって始められたと伝えられています。

溝口村から移り住んだ矢壁・原・下川家の三家が、万治元年（一六五八）に御用紙漉きになったのをはじめとして、伊藤、坂口、西、松村、木村、末永、山下、宮田家のあわせて十一軒が御用紙漉きをつとめました。

宝暦七年（一七五七）、御用紙漉きになった木村喜三次は、越前の紙漉き技術を導入し、大高檀紙や大長春書紙など高級紙の製造や、透かし入りの紙の開発に成功し、宮地紙を大きく発展させました。そのほか、五色水玉紙や打疊紙などの装飾紙、障子紙やちり紙などさまざまな紙が漉かれていました。

また、厚手の和紙で作られた八代紙（紙衣）も全国的に知られた名産のひとつで、天和三年（一六八三）より御用紙子師をつとめた宮原家で生産されていました。

（詳細↓展覧会図録「和紙―用と美の世界―」平成十五年 本館発行

刀の鐔

寛永九年（一六三二）、細川三斎について八代へきた職人に

川俣木具膳類 八代並山鹿諸紙 八代植柳木錦(綿?)
など、多くの品目があげられています。

このうち、工芸品では、高田焼(八代焼)や宮地手漉和紙
など、現代までその伝統が受け継がれているものもあり
ますが、多くはその存在すら知る人も少なくなっています。

本館では、八代の歴史と文化を織り成してきたこれら
の工芸品について、調査研究と資料の収集を進めてきま
したが、実物作品をはじめ、それらの製作に携わった人々
に関する史料もだいたい集まってきました。

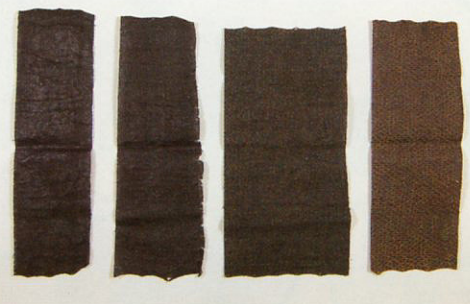
本展覧会は、こうした関連資料を交えながら、江戸時代
の八代で生産された工芸品を紹介します。八代の地で生
活し、地元の人材を活かしながら、ものづくりに励んでい
た匠たちの技に触れていただければ幸いです。

※注「名物数望附」は『肥後説史総覧』(昭和五十八年 鶴屋百貨店発行)
に収録されています。



正平草と染めに使った型革

江戸時代末期～明治時代



八代染草

※「草(かわ)」は、革をなめして柔らかくしたもの
染草とは、主に鹿の草を染めたもので、甲冑や馬具などの
装飾に用いられました。九州は、古くから染草の産地として
知られ、室町時代に八代を領有した相良氏は中央への贈答品
にしばしば染草を用いました。

江戸時代の八代染草は、「御免草」と呼ばれ、八代城下・宮ノ
町(はじめ細工町)の牧家で製造されました。享保四年(二七
一九)には、将軍家への献上品として「天平草」五枚、「正平草」五枚
「小紋染草」五枚を納めることになり、藩主の甲冑の修理
や新調にもこの染草が用いられました。

正平草には「正平六年六月一日」の文字、天平草には「天平
十二年八月日」の文字と不動三尊像などが染められていま
すが、その由来や製造法など、いまだ謎の部分が多い工芸品
です。

(詳細)展覧会図録『くまもと県立美術館 八代市立博物館蔵』 平成四年 本館発行

※掲載作品はすべて八代市立博物館蔵

八代搗剥

搗剥は、綿布などに柿渋を塗っ
て防水加工をしたもので、雨具な
どに使用されました。

八代城下・徳淵町の岩本家が
一子相伝で製造していたといわれ
八代の名産でしたが、明治以降そ
の生産はとだえてしまいました。

搗剥製 江戸時代後期(十九世紀)



河俣塗

八代郡・種山手永の河俣村(現東陽町河俣地区)で江戸時
代から明治にかけて生産されていた塗り物です。元禄年間に
日向国からやって来た早田莊左衛門が始めたといえられ、寛
政三年(一七九一)、富岡仲平が藩の御用指物師に命じられて
以降、本格化しました。

天保七年(一八三六)、仲平(三代)を含む
指物職人十六名が、「製法を秘伝とすること」
「丈夫で良質な製品を作ること」などを誓っ
た起請文が残っており、村を代表する産業
となっていたようです。

木地を渋や弁柄、クチナシなどで赤茶色
に下塗りし、透漆を塗って仕上げる春慶塗
で作られているのが特徴で、製品の裏に、
産地と作者を示す印が押されているものが
あります。



平田彦三という鐺作りの名人がいました。彦三の没後、息子
少三郎は熊本へ移り、婿養子の三郎兵衛は八代二ノ町で判
屋職(金銀の鑑定)をつとめ、甥の志水仁兵衛が袋町にあつ
た彦三の住居を継いで「白銀細工」を家業としました。
三斎の没後、彦三の弟子西垣勘四郎も熊本へ移りますが、
志水家は代々八代に住んで、二代以降甚吾または甚五郎を名
のりました。平田、西垣、志水の各派は林派とともに肥後を
代表する金工で、全国的に高く評価されています。



(上) 鐺 銘「八代 甚五作」
(下) 唐草文象嵌鐺

江戸時代中期(十八世紀)
江戸時代中期(十八世紀)

河俣塗膳 文政十二年(一八二九)

富岡仲平(二代)作

肥後国絵図（天保期） 256.8×275.3cm 八代市立博物館蔵

くにえず ちせい こくたか
国絵図とは、江戸幕府が全国の地勢・石高・交通路を把握するため、諸大名に命じて提出させた国ごとの地図で、江戸時代を通じて4回（慶長・正保・元禄・天保年間）作成されました。この絵図は、江戸時代後期（19世紀前半）天保年間に熊本藩で作成した絵図の写しで、郡ごとに色分けされた（八代郡は黄色）円の中に村名を記し、海岸線も干拓で広がる前の状態で描かれており、昔の八代郡のかたちがよくわかる貴重な絵図です。

●ご利用案内●

観覧料 一般300(240)円 高大生200(160)円
※中学生以下は無料
※友の会会員の方は、会員証でご観覧いただけます。

開館時間 午前9時～午後5時（ただし入館は4時30分まで）
休館日 月曜日（祝日の場合はその翌日）、祝日の翌日（土日をのぞく）

●交通のご案内●

JR 鹿児島本線・肥薩おれんじ鉄道「八代駅」下車3km
九州新幹線「新八代駅」下車6km
バス 【八代駅から】
八代産交行（約15分）：北荒神町福祉センター前下車徒歩5分
【新八代駅東口から】
八代産交行（約24分）：北荒神町福祉センター前下車徒歩5分
第一環状線（約13分）：検察庁・法務局・博物館前下車すぐ
第二環状線（約24分）：北荒神町福祉センター前下車徒歩5分
八代港行（約10分）：松井神社前下車徒歩5分
車 八代ICから八代港線経由で7km
【駐車場】大型バス4台、普通車40台駐車可



八代市立博物館未来の森ミュージアム
熊本県八代市西松江城町12-35